２０２２ 沢便り２　組長はクライマー

奥多摩・坊主谷(2022/6/4)

Ｋ林、Ｔ山、Ｈ口

　ゴールデンウィーク以降、休日に出掛ける車がかなり増えてきているのを感じる。おかげで中央道は早い時間から渋滞が発生し、奥多摩駅で待つＴさんをピックアップしたのは３０分遅れとなってしまった。
　Ｋ林さんを組長とする日帰り山行集団『Ｋ林組』が今週目指すのは奥多摩の坊主谷。鷹ノ巣山の南西に位置し連瀑帯が続く濡れに行く沢である。

　奥多摩湖を峰谷橋から三沢集落を越え茂窪谷左岸林道まで入って行きたかったが林道入口のゲートが塞がれていて手前の駐車スペースに停め歩き出すことになった。林道を歩いて行くと
「ねぇねぇ、この沢ってなんか暗いね」とＴさんが口に出した。すると
「そうですね、奥多摩は基本“谷”ですからね。丹沢が〇〇沢に対し奥多摩は〇〇谷。切れ込みが深いですよ」とＫ林さんがクールに答えた。

　出合までどのくらい歩かされるのかと思っていたが２０分ほどで到着した。沢支度を終えて９：５０入渓。渋滞と林道歩きで予定より１時間近い遅れとなった。
　ひとつ目の堰堤を右から、ふたつ目の堰堤を左から越えて行くと二人組の先行者が見えた。手にルアー竿を持っていた。釣りに夢中で僕らに気づかなかったが、彼らのすぐ後ろでＫ林さんがバッシャーンとこけた（黒苔で滑ったらしい）。二人がびっくりして振り返ったのは遊漁券売りだと思ったのだろうか。彼らに「釣りのポイントを荒らさないように行きます」と断って先行させてもらった。

　谷筋が狭まり暗くなるとゴルジュの始まりだ。流れが右に折れ３ｍチョックストーンの滝が現れた。取り付きにくそうなチョックストーン脇を水が勢いよく落ちている。Ｋ林さんは取り付きたがっていたが、これからいくらでも滝は出てくるし、いきなり濡れるのもイヤだったのでＴさんと僕は右岸の巻きを提唱し多数決で巻くことに決まった。後方に釣り人二人がこちらを見ていることに気付いたので「僕らここは巻きますよ」と合図を送った。そうすれば彼らこの釜で竿を出すことができるだろうから。

　沢筋に下りて小滝を越えて行くとロボットが涙を流しているような可愛い堰堤が現れた。さらっと右から越えて行く。

　スダレ状に広がる幅広５ｍの分岐瀑が現われＫ林さんが濡れながら上がると、濡れるのを避けたいＴさんが
「ねぇねぇ、あっち（右岸）から行けないかな。」
「んー、でも僕はノーマルに行きますよ」と水流沿いを続いた。水流に突っ込んだ手から水を浴びシャツが濡れた。
　するとＴさん、考えた挙句やはり右岸に取り付いた。濡れたくないと言う強い意志が水場のバカ力となり何とか上がって来た。
　その後の４ｍの滝でもＫ林さんが水流に沿って濡れながら上がると、Ｔさんは左の岩沿いに濡れないルートを見つけた。こういう嗅覚はさすがである。

さて、谷がまた右に折れた所にこれまでの小滝とは様子が違う８ｍの石滝が立ち上がっていた。左岸に残置ロープが見えあそこから巻きかなと思ったが、Ｋ林さんがザックを置いて偵察に行き
「大丈夫、これ行けますよ」とザックを背負って取り付いた。
手掛かりが離れていて手間取った所もあったがほぼ垂直なルートで上がって行き滝の上で手を挙げた。
「おーっ！」とこちらも手を挙げて応えた。
１０ｍのロープが下ろされＴさんが上がる。もう一度ロープが下ろされ末端を付けて僕も取り付く。壁が立ち上がりスタンスは浅くロープの有る無しではプレッシャーが違う。上がり切ると怖いもの見たさで切れ落ちた崖を見下ろしてみた。

次から次へと４~５ｍの滝が繰り返す。今日は濡れたシャツが冷えて気になるが、もっと暑ければ気持ちいいに違いない。

ここから核心の５連瀑となる。最初の５ｍ、７ｍはガレた右岸を巻き、次の８ｍは水流左にある木を手掛かりに上る。すると１２ｍの大滝が現れた。
真っ白な直瀑が冷気を吐き出し落ちている。濡れた岩場、直登はできそうになく、上がるとすると左岸の斜めのバンドを上がるのだろうが高さがあり壁に手掛かりも無さそうで腰が引ける。すると左岸に巻きのルートが見えた。
「あそこ行けそうだよ」と言ってみたが
「いや、前に上がったことがあるんで」と言って５０ｍのロープをほどき始めた。
「ちょっとあっち（巻き道）の方がいいよね、えっ」とＴさんも言うので、もう一度
「あそこ行けそうだよ」と繰り返したが
「・・・・」Ｋ林さんの心は決まっていた。

滝の手前に立ち長考した後、「よし」と言って釜に入って行った。
しかしへそ上まである釜から左岸に上がる所でなかなか上がれない。岩はへこみのある丸い岩でへこみに両手を添えてようやく体を水面から引き上げた。
「この下に動くけど石があるのでそれ使わないと上がれない」と言った。そしてへこみに溜まった泥をどけながら上がって行く。ハーケンを打って中間支点を取りバンドに取り付く。バンド上でも泥や落ち葉をどかしながら進む。高い位置の立木にシュリンゲで中間支点を取り、乾いた岩に上がると最後の２ｍを上り切り滝の上に立った。
「やったぞ」という表情で手を挙げたので
「うおーっ！」とこちらも手を挙げて応えた。組長すごいすごい。でも同じ所を行くのも大変そうだ。

「あたし最後に引っ張ってもらうから先行って」とＴさんに言われ行こうとすると、滝の上から「最初の所上がりにくいからＴさんを押してあげて」と指示が入りＴさんに先に行ってもらうことになった。Ｔさんが釜から左岸に上がるのを押し上げロープを送る位置に戻る。Ｔさんの上がり方を見守りながら待ち、上がり切った合図を聞いてロープをフィックスし手を上げた。

釜に入り左岸に上がる所、へこみに手を掛け下の石を探すが無い（転がったのか）。足が掛かる所と言えば右にある出っ張りのみ。先ほどＫ林さんがしたようにへこみに手を掛け上がろうとしたが体が持ち上がらない。もう一度足で下の石を探すがやはり無い。へこみを使って何度もトライするが上がらない。ロープをゴボウで引っ張ってみたがロープが伸び体は上がらない。でもこれしか無いと果敢にロープを引くがロープの伸びを感じるだけであった。

だんだん腕も疲れてきた。「これは僕だけボウズかな。諦めて高巻きするしかないか」と思っていたところ、カラビナにテンションが掛かり始めたのを感じた。これはもう少しテンションが掛かったらいけるかもしれない。腕の力は弱まっていたが必死でロープを手繰り右の出っ張りを利用して何とか体を左岸に持ち上げられた。手の力は抜け息は荒かったが何とかスタートラインに立てた。Ｋ林さんにちょっとタイムのサインを出し、息を整えてからバンドに向かって上がり始めた。

腕が疲れていたので普段以上に足場に気を付けバンドに辿り着く。ハーケンを回収し壁に体を傾けバンドを上がる。シュリンゲとカラビナも回収し後は上がるのみだ。高さはあるが手掛かりはしっかりしていた。Ｋ林さんの位置まですぐそこだ。気を抜かず上がり切り「解除！」と言って末端を外した。

「・・・Ｋ林さん、ありがとう。」

肩がぐったりしたが上がり切った。いや、上がらせてもらった。高揚感が半端なく湧き出している。顔を上げ辿って来たルートを見直した。

「Ｋ林さんよくあそこ上がったよね」と後で言ったら

「これでもクライマーの端くれですから」と答えが返ってきた。なにせ今回はここを上りたくて５０ｍロープを持ってきたそうだ。

中間地点である中ノ谷出合の二俣に１２：５５。ここから渓相はガラッと変わる。これまでの連瀑の谷からウォーターウォーキングの沢となる。

傾斜も緩やかになり、そこそこきれいな分岐瀑があったりするが、何せ距離が長く、前半の緊張感とは打って変わってダラダラ感が出て来た。ワサビ田跡の石積みが続き、取水漕が現れる頃にはさすがにもういいやという気持ちになっていた。この辺りからエスケープするルートはないかと左岸に注意して進むが思ったような踏み跡は無い。

水が涸れてからも谷筋は続き、さすがのＫ林さんの足取りにも疲れが見えてきた。最後の斜面はせり上がり、ジグを切って上がると、ようやく鷹ノ巣山からの登山道に出た。１５：１０になっていた。

ハーネス、スパッツを外し、靴を登山靴に履き替えると３人並んでＫ林組の掛け声「Ｋばやシ～」で記念撮影。ここから２時間は掛かるので急いで下山しなければ。

浅間尾根登山道を進んで行くと

「あれあれっ、なんかここ奥多摩っぽくないねぇ。周りが杉じゃないから」とＴさんが口にした。確かに周りは雑木林で明るかった。さらに行くと登山道の両脇にはネットが張られ椎茸栽培の広大な敷地が続いている。Ｋ林さんがさっそくネットで調べると『東京原木しいたけ“たまのこ”』というブランド物だそうだ。『肉厚でジューシー、アワビのような触感』という触れ込みに気になる気になる。

栽培地が終わると奥多摩らしい杉林となり高度を下げて行く。浅間神社を越えた先で登山道から離れ南西に伸びる尾根を選ぶ。駐車場までのショートカットのためだ。
痩せ尾根を突き進んで行くともうあと少しという所から斜面が急になり木を利用しながらの下りとなった。
林道がもう下に見えているが、さすがにここはと思ったのだろう、Ｋ林さんが
「ゴボウで下りましょう」と５０ｍロープを取り出した。
そして１７：３０、茂窪谷左岸林道に下り立った。それにしても最後の下りは踏み跡も無く荒れていた。ＧＰＳでルートを確認したＫ林さんは
「いや、これルートは合ってます。たぶん今年まだ誰も来てないんじゃないかな。」
「あぁ、長かったねぇ。面白かったけど二俣過ぎて途中から林道に出れればいいのにね、えっ。」
最後のゴボウ下りまで息つかせぬ行程。あの１２ｍ大滝の消耗と興奮がまだ腕と肩に鈍い疲れとなってのしかかっている。イタズラボウズ、手ごわく面白いヤツだった。

（Ｈロ　記）